

PBLとしての海外実践活動と 学習効果に関する質的研究

野本 尚美・澤崎 敏文

(2022年2月28日受理)

A Qualitative Study of Overseas Learning Activities as Project Based Learning

Naomi NOMOTO・Toshifumi SAWAZAKI

要旨：近年、日本においてアジア各国との関係性が強まり、国際理解・国際協力・多文化共生という観点からも、アジアの国々について学ぶことの重要性が高まりつつある。そこで本学では2019年度に社会活動実践の一環として、台湾にある民間企業と連携したPBL活動を企画し、7名の学生が参加した。本研究では、PBL活動に参加した学生4名に対するインタビューを質的に分析し、研修を通して学生がどのような学びや気づきを得たのか明らかにすることを目的とする。

Key words：PBL アクティブラーニング 質的研究

1. はじめに

近年、社会人基礎力の重要性に対する関心が高まり、大学等においてグループワークや共同学習を中心としたアクティブラーニング型の授業が実践されている。また、タイなどの東南アジア地域を中心とした課題探求型プログラムの科目を設定している大学等も多く、国際理解・国際協力も視野に入れた、より魅力あるカリキュラムを学生に提供することが可能となっている。しかし、そのようなプログラムに参加した学生が具体的にどのような学びや気づきを得たのかという点については、その調査方法も含めて十分に検討されているとは言えない。そこで本研究では、PBL活動として設計した台湾における海外研修プログラムを通して学生にどのような学習効果があったのかを明らかにするために、自己効力感の測定に加えて学生4名に対するインタビュー調査を行った。

2. 海外PBL活動の流れ

これまでの研究課程から、PBL型授業において

は、主に次の3点を考慮しながら授業設計を行ってきた¹⁾。

- 1) 学生がプロジェクトの目的を十分に理解し、自発的に行動できるような環境を整えること
- 2) 教員側でPBL活動をデザインしすぎたり誘導しすぎたりしないこと
- 3) プロジェクトの最終成果が具体的な形となって残ること

以上に加えて、海外でのPBL活動では、安全かつ継続的に実践できる環境についても配慮する必要がある。そこで本学では2018年度に台湾において海外候補地調査を行った後、2019年度に学生参加での実証を行い、以下のようなPBL授業モデルを想定してきた²⁾。

Step1：事前学習・準備等

連携企業等からの事前課題に対する調査を実施。課題解決に向けた仮説等を検証しながら、現地での活動(Step2)に備える。

Step2：海外での演習活動

海外では、現地でのフィールドワーク等の探究活動、企業等との連携などの演習活動を実施。課題解決方法の提示、協働プロジェクト等を実施する。また、現地の文化や歴史等に触れる機会も設定する。

Step3：事後学習、報告会

帰国後、必要事項を調査・補足の上で、報告会等を開催。参加していない学生等への情報の共有を行う。

2019年2月、研修フィールドとしての候補地等を調査するために、台湾（台北市）を訪問し、現地企業である出版社と事前打ち合わせを行い、研修プログラムのスケジュールや具体的な内容等について検討した。また、学生に対する課題を提示してもらった。

研修プログラムへの参加を希望した本学学生7名（1回生3名、2回生4名）は、事前学習として2019年7月から8月にかけて学内で実施された研修会に参加し、企業から提示された課題について日本での動向も踏まえて調査を実施した。またプレゼン発表や意見交換を行い、自分たちのアイデアについてまとめ、渡航前に最終提案書（英語・日本語）を作成した。

2019年9月に4日間の日程で台北市を訪れ、出版社の編集長から、台湾における出版業界の現状、音楽業界の現状と課題等について学び、その後、自分たちがまとめた提案内容について英語でプレゼンを行った。プレゼン後には編集長から具体的なアドバイスやコメントをもらい、意見交換を行った。その後、社内（編集部の仕事の様子）を見学し、学生たちが出版業界の仕事について学ぶ様子が観察された。また、中正記念堂や故宫博物館、夜市などを訪れ、台湾の歴史や文化について学ぶ機会を得た。グループでの自由行動の日も設け、自分たちが事前に計画した地域を探索した。

3. 研修の効果測定

本研修の目的は、これまで習得してきた学習内容を企業から与えられたプロジェクトの最終目標に向けて実践することであった。そこで、医療等の分野

においても用いられているself-efficacy（以下、「自己効力感」という。）の変化を指標に、研修効果の考察を行った。一般性セルフ・エフィカシー尺度³⁾では、16項目を点数化し、その点数が高いほど自己効力感が高いと評価する。本研究では、研修（海外研修プログラム）に参加した7名の学生に、自己効力感測定のためのアンケートに答えてもらい、出国前と帰国後でその変化を比較した。アンケートデータは7名の学生中、6名分のデータ取得となった。（1名は帰国後のデータを取得できなかった。）

今回の自己効力感の変化については、7月に企業からの課題を提示されたスタート時点から、帰国後の学内成果発表終了後までのプロジェクト全体の期間の前後で計測することも検討したが、学生は今回のプロジェクトのみを体験しているわけではなく、学内及び学外においてそれぞれ個々の環境で様々な体験をしており、多様な学びが存在するため、自己効力感の変化を今回のプロジェクトだけに特定することは困難であると考えた。このような理由から、出国前、帰国後という短期間ではあるが、要因を特定しやすい環境での調査とした。結果は図1に示すとおりである。6名の得点変化を比較すると、研修前の平均値が8であるのに対し、研修後の平均値が9と上昇しているものの、有意水準を $p=0.05$ としたt検定でのp値は $p=0.29556$ となり、研修前と研修後での自己効力感の上昇について有意な差は見られなかった⁴⁾。

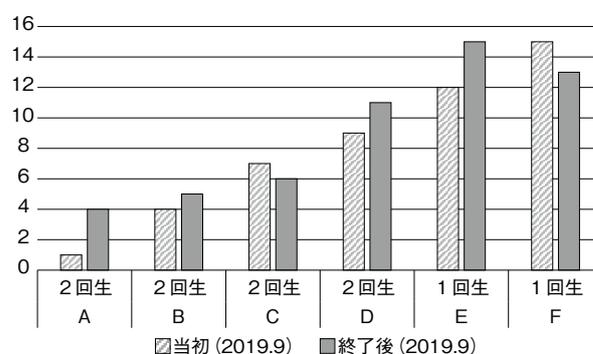


図1 参加者個人の自己効力感変化のグラフ

4. 海外PBL活動参加学生へのインタビュー調査

研修に参加した学生のうち2回生4名（A, B, C, D）に対してインタビュー調査を実施した。インタ

ビュー開始時には本研究の目的を口頭で説明し、インタビュー内容の研究使用と、ICレコーダーによる音声記録の許可を得た。この調査では、あらかじめ質問内容についてある程度決めておき、状況に応じて質問を変更したり追加したりしながらデータを収集する半構造化インタビュー形式を採用し、2020年2月に学内において実施した。実施時間は1人につき約30分間であった。音声データの文字起こし後、発言内容をテーマごとに分析した。発言内容は学生の語りのニュアンスを伝えるためそのまま記載した。

4.1 企業訪問における学び

学生たちは、前述したように台湾の企業側から事前に提示された課題に対し、学内での事前研修会を通して各チームでアイデアを練り、プレゼン資料を作成した。台湾における企業訪問ではその資料をもとに英語でプレゼンを行った。研修に参加したきっかけとして、この企業訪問自体に興味を持ったからという学生もあり、以下のように話している。

A「自分で将来、何か物を作って売ったりしていたらなっているのも思っていたので。雑誌の編集をしてる会社も見に行けるといこと。物を売る人が、どういう考えで仕事をしているのかというのを知りたかったのと、日本で売るときと海外で売るときと、視点とかも違ってくるのかなと思って。台湾で、どんなふうに物が売られてるかを知りたかったからっていうのもあります。」

D「企業訪問も、絶対、旅行代理店介してとか、ツアーだと行けないじゃないですか。私自身、本が好きなんで。出版社っていうのも、行くきっかけになったとか。」

以上の内容から、この研修に参加したきっかけとして単純に海外に行きたいからという理由だけではなく、短大が提供するプログラムだからこそ体験できるPBL活動に価値を見出していることもきっかけの一つであると考えることができる。

また、この企業訪問でのプレゼンを通して得た学びについて学生たちは以下のように話している。

A「私たちとしては本気で、こんな感じでしたら売れるんじゃないかっていうのを考えてプレゼンしてたんですけど、経営する側からしたら、これは難しいかなっていう意見をたくさんいただいて。やっぱり実際に働いてると、学生と違って、こんなふうにしたっていうのと現実のギャップっていうのがちゃんと見えてくるんだなって思ったのと。特に、付録を付けようっていつても、実際にすると、その付録が不良品だった場合の取り替えとかを考えるとリスクが大きいつておっしゃってたので、なるほどなって思いましたし。」

B「スライド作ってるときは、これがいい方法だと思って作っていくわけじゃないですか。プレゼンした後、これは経費がかかるとかそういう流れで、そういうことも考えないといけないんだなっていう。考えが甘かったなって思いました。」

C「プレゼンする前は結構みんな準備してて、こういうの採用されたらいいとか自分で思ってたけど、実際やってみて、多分そういうのもともとを考えてて、こういう難しいことなんだなと思って。実際に簡単にできることじゃないんだなっていうふうには思った。」

研修に参加した学生は、理想と現実のギャップや自分たちの認識の甘さ、力量不足を感じていたということが分かった。自分たちが十分に練り上げたと思っていたアイデアであっても、コスト面やリスクマネジメント等の観点から検討し直さなければならない点が多々あるということがわかり、自分たちの未熟さを客観的に知る機会を得たということが彼女たちにとっての大きな学びにつながったと推察できる。またこのことが、自己効力感の測定において有意差が見られなかった要因の一つであることも考えられる。

また、日本においても現場を見る機会が少ない学生たちにとって、出版社の社内をじっくり見学できたことは大変興味深いものであったということも話している。

A「出版社で働かれてる方っていうのも、私たち、生活してるだけではお会いすることなかったと

思いますし。物を売っていくには、これだけの苦勞されてるんだなって、オフィス見ても分かりましたし。これから働く身としては感動しました。」

この企業訪問を通して、学生たちは自分たちのアイデアの未熟さやビジネスの世界の厳しさを知るとともに、実際の現場を見学させてもらうことで会社の雰囲気や具体的な仕事内容について理解を深めることができたと推察できる。

4.2 語学（英語・中国語）に対する関心

企業訪問の際に行った英語でのプレゼンについて、学生は以下のように話している。

D「英語でプレゼンしたのは、すごい成長したなって思います。母国語じゃないんで、ちゃんと伝わったときは嬉しいなって思いましたし。アイデアをまとめてPowerPoint作って、英語に直してっていう作業がめっちゃ時間かかって大変だったし。手抜きたいなって思ったときもあつたんですけど。手抜かずじちゃんと最後まで詰める作業とかができたことで、相手にもアイデア伝わったり、笑顔で頷いてくれたりとかしたんで。根気よくってうか、頑張ったことが報われたって感じたときはうれしかったし、一つ成長できたなって思いました。」

本学の英語の授業においても同じクラスの学生の前で簡単なプレゼンをすることは経験しているが、台湾の企業の方の前で英語を用いたプレゼンを行うことは学生にとって非常に緊張度の高い、難しいタスクであったと思われる。上記の学生の発言からは、その課題を全力でやり切ったことで大きな達成感を得られたことが伺える。

また、台湾で英語を用いるという体験をしたことで、英語力を向上させることへの意欲や英語でのコミュニケーションに対する興味・関心を示す発言があった。

A「英語って、一応、世界共通語ですし、どこの国でも通用するっていう言い過ぎかもしれないですけど、でも覚えておくと損はないなって思いました。英語力が欲しいなって思いました、

台湾に行って。日本だけだと、島国だし、他の国とつながってるわけでもないし、英語って別に学んでも使わないしって思う人もいると思うんですけど。実際にこうやって海外に行ってみると、英語ってこういう時に使えるんだとか、しゃべったことない海外の人でも、自分からしゃべってみようと思えばコミュニケーションが取れるんだなって思いました。実際に英語を使う国に行ってみるっていうのは勉強になりました。」

またこの学生はファストフードの店員に対してうまく英語が話せなかったという失敗談を話した後、以下のように述べている。

A「全然違う国の文化を見たり体験したりできたことは、大きかったと思います。さっきも出ましたけど、英語しゃべれると、考えが違う人に、よりたくさん会えたりとか。例えば海外の、英語でしか出版されてない本とかも読めるようになったりとか。自分の知識を付けるっていう面でも、役に立つなって感じましたし。（中略）だから海外の言葉ってしゃべれると楽しいし、自分でもっと違う国に、例えばアメリカとか行ってみたら、全然違う人とか文化に触れられるし。自分の中の、自分の視野を広げられるっていうか。理解できるものが増えてくから、生きてても楽しくなるだろうなって思いました。」

英語でうまく意思疎通ができなかった経験についてマイナスに考えるのではなく、もしも自分に英語力があればもっといろいろなことができるようになるかもしれないという前向きな希望を持ち、英語に対する学習意欲を向上させていることが伺える。また以下の発言からは、台湾の人が上手に英語を話す様子を見て、自分と比較し、日本と台湾における英語教育の違いに対して関心を持ったことが伺える。

A「あっちの国って、ちゃんと英語を学んでるんだなって思って。日本だと、取りあえず学年上がればそれでいいやっていう感じじゃないですか。学習の内容とか、段階がどうなってんのか分かんないんですけど、例えば道が分からなくて、S先生がちょっと英語でしゃべったら、

すぐ英語でぱっと返ってきて、感動して。あの英語で聞かれたら、自分、答えられないなと思って。日本より英語の大切さを分かっている国だなんて思いました。英語、頑張ろうって思って、日本に帰ってきて。」

また、英語だけでなく、中国語の授業で習った漢字が実際に台湾で使われていることを知り、中国語や異文化に対する理解が深まったことや台湾だけでなく違う地域にも興味・関心が広がったことが以下の発言から推察される。

B「ファミリーマートの漢字を知っていたから、本当にファミマやって。本当にこの漢字なんやあって。授業で習ったんです。」

C「もともと一人旅というか海外めっちゃ行ってみたいくて、先輩が海外に行って自分の人生観、変わったって話を聞いて、それを聞いて、短い期間だけど海外行ってみるとなんか変わるんかなっていうふうに自分で思ってて。いざ行ってみて世界が広がったというか。日本だけが安全みたいな感じに考えてたけど、海外にも足延ばしてみても、いろんな所、行ってみたいなっていうふうには思うようにはなった。」

日本において、使える英語の重要性が叫ばれて久しいが、実際に海外に行くことで初めて英語を学ぶ意義や言語の多様性について考えさせられることも多い。今回研修に参加した学生の発言からも、たとえ英語力が不十分であっても、実際に海外の人とコミュニケーションをとることで使える英語をもっと学びたい、いろいろな国の人と話してみたいという意欲が高まる可能性があるということが示唆される。

4.3 グループワーク・協働

海外におけるPBL活動では、日本における研修だけでなく現地での活動においても他の学生と一緒に行動しなければならないことが多い。学生たちはこの研修を通して、グループワークや協働についてどのような気づきを得たのだろうか。

まず、本研修に参加するにあたって自分だけでなく他の学生がいることへの安心感があることや、あまりよく知らない学生がいることを当初は不安に

思っていたものの研修を通して親睦を深めていった様子が以下の内容から伺える。

C「1人やと多分、行ってみようみたいな気にはならない。だって初めての海外で1人で行ってみようみたいな子、どんだけすご過ぎる、みたいな。私なら絶対無理だから。慣れてきたら1人で行くのも楽しいだろうなとは思うけど、最初っから1人で行って全部1人で行動するのは、ちょっと怖いかな。」

B「〇〇さんは△△さん（共通の知人）と仲がいいんで、ちょこちょこは仲良くしてたし、□□さんはゼミ一緒。だけど、あんまり話したことない。**さんは全く知らなかった。あっち行ってから仲良くなりましたね。□□さんに関しても、趣味の話とか話し合ったんで。*さんも台湾研修、終わってからもちょこちょこ話します。確か成人式のときに会ったんですよ。一緒に写真とかを撮ったり。最初、結構、抵抗あったんですよ。××クラス、自分だけだったんで、でも知ってる子いるから大丈夫かなって思った。」

また、以下のように、グループ全員でプレゼンの準備などを行ったことで、協働の重要性に気付いたという意見もあった。

D「あと、今回一緒に行ったメンバーがよかったっていうのもあるんですけど。一人一人、考え方とか性格とかも違う、2年生に関してはそういう4人が集まったんですけど。そのぶん、自分だとあんまり行きたいリストとかに入らないようなお店とかも一緒に行くことができたし。メンバーと一緒に何かプレゼンをして、PowerPoint作り上げたっていうのもいい経験っていうか、グループワークの大切さとか知ることができたんで。今回の研修は自分にとっていい経験になったなって思います。」

以上の発言から、初めから参加者全員が仲の良い者同士ではなくても、研修を通して共通の目的のためにお互いの力を合わせることで徐々に絆を深め、最終的にグループワークの重要性に気づいた学生もいたと考えることができる。

5. まとめ

台湾研修に参加した学生について、量的・質的の両面から学びの成果について検討した結果、量的分析では研修の前後で有意な差は見られなかったものの、質的データからは自分たちの認識の甘さに気づき新たな視点などを得たことが成長を感じることに繋がったと考えられる。インタビュー調査から、台湾のローカル企業との連携というリアルなプロジェクト体験を通して、学生たちが異文化に触れ、様々な学びを得ていることがわかった。

PBLにおける学習効果を測定するための方法について、今回は自己効力感の測定に一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いたが、活動本来の目的に合致しているかどうかをどのような指標で図るべきかという点については今後さらに検討する必要がある。また、インタビュー調査の実施時期が今回は研修の約5か月後となり、個人の記憶がやや曖昧になってしまっていた部分もあったため、今後はより早い時期に行うことが必要であると考え。インタビュー調査の仕方についても、質問内容について被験者が多くを語らないときに聞き手がしゃべりすぎてしまった場面があり、被験者が体験や感想について自由に語るための雰囲気作りが不十分であったという反省がある。今後はこれらの点について再考した上で、PBLとしての海外実践活動のさらなる充実を図るとともに、その学習効果の評定の仕方について量的のみならず質的な観点からも研究を進める必要がある。

引用文献

- 1) 澤崎敏文(2016)『地元企業等との連携によるPBL型授業設計とその実践』日本教育工学会第32回全国大会講演論文集, pp.163-164
- 2) 澤崎敏文, 野本尚美(2021)『オンラインを活用した海外企業連携によるPBL型授業設計に関する考察』教育システム情報学会第46回全国大会講演論文集, pp.23-24
- 3) 坂野雄二, 東條光彦(1986)『一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み』行動療法研究12(1), pp.73-82
- 4) 澤崎敏文, 野本尚美(2021)『海外での企業連携によるPBL型授業設計と実践に関する考察』仁愛女子短期大学研究紀要第53号, pp.13-18